大阪商業大学学術情報リポジトリ

企業者の二つの貌ーJ.A.シュンペーターの企業者論をめぐってー

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 2017-04-14
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 塩田, 眞典, SHIOTA, Masanori
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/419

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

企業者の二つの貌

—J.A.シュンペーターの企業者論をめぐって—

塩　田　眞　典

はじめに
1. J.A.シュンペーターの企業者論
2. 企業者神話とその限界
3. 神話からの脱却—市場と企業者—
むすび

はじめに

起業家やベンチャービジネスにまつわる議論が頻繁に戦わされる昨今であるが、経済学的な立場からそのような議論の起点を求めるならば、それは多分J.A.シュンペーターの企業者論に行き着く。かような次第で、彼の理論もこの時代の潮流の中で再発見、再評価されつつあるようだ。しかし、その安易な過大評価は、現実の企業者活動に含まれる重要なある側面を隠蔽することになるから慎まなければならない。本稿では、以下シュンペーターの企業者論の今日的な意義とその限界を論じ、さらに限界を克服する方向を模索する。

1. J.A.シュンペーターの企業者論

従来より企業者論の文脈で多々指摘されていることだが、ワルラスの一般均衡理論をコアにもつ新古典派経済学の中には真の企業者の活動を論じる余地はない。そこには、最適化計算を行う主体が存在するにすぎない。最適化計算とは、すでに定常状態に達した企業における経営者の常軌的作業（ルーティンワーク）に相当する部分である。これは明かに真の企業者の為すべき作業領域ではありえず、たかだか企業経営者ないし管理者の領域に属するものでしかない。もちろん、新古典派経済学のテキストにも企業者は登場する。しかし、それはルーティンワークをこなす主体の別名でしかない。つまり、新古典派の市場モデルでは、真の企業者が仕事を完了させた段階から議論を出発させる。ここに、企業者の仕事はモデルの前提を成す様々な与件の中に封じ込められることになる。このような新古典派の機械論的な市場観を受容した上で、真の企業者活動を導入しようとすれば、企業者はモデルの与件を変化させる主体として、市場モデルに対しいわば外付けされる形で議論を展開せざるをえない。

企業者活動にまつわる議論の終点が市場経済モデルの出発点を成し、また市場モデルの終点が企業者論の出発点を成すような体の理論、これがJ.A.シュンペーターの企業者論なのである。このような次第であるから、経済学の分野で企業者の役割を論じる場合、彼の企業者論はその価値評価はさておき、まず最初に採り上げられる類のものであり、本稿もその例外ではありえない。

企業者活動にまつわるシュンペーターの議論は大きく分けると二つの部分から成る。彼がいまだ20代にして著した書物『経済発展の理論』(1912年)の中で主として展開されている経済発展に果たす企業者の役割についての議論が一つ、いま一つは、彼の晩年の著作『資本主義・社会主義・民主主義』(1942年)にみられる見解、すなわち未来の資本主義社会における企業者機能の無用化という予見に含まれる議論がそれである。

まずは『発展の理論』における議論から始めよう。彼はすでにウィーン大学の学生であった時代にレオン・ワルラスの著作に接し、それを市場経済の本質を鋭く抉ったものとして高く評価し受容するほどに学問的に早熟であった。つまり、彼は若くして今日でいう新古典派的な市場観のコア部分を受け入れていたことになる。だが、彼の主たる関心は資本主義経済システムがはらむ経済発展や景気循環といった動態的側面にあった。資本主義はその本質において動態的なシステムであり、静態的な資本主義経済などというものは、言語矛盾だといわざるをえない。シュンペーターの資本主義経済観とは、そのようなものなのである。資本主義経済がはらむこのような動態性を解明しようとする意図の下に著された書物が『発展の理論』である。

資本主義経済システムの根底を成すのは市場であり、そこにおける日々の取引活動であることは確かだ。ワルラスはこの部分を解明したのだとシュンペーターはみる。ただし、市場それ自体は静態的な制度にすぎず、そこから動態的な要因が内生的に生じる余地はないと彼は考える。ならば、市場経済イコール資本主義経済という等式は成立しない。市場経済に何らかの動態的要因が接合されたとき、そのシステムは資本主義的なものと化する。しかも、この動態性が、地理上の発見、戦争や革命、人口増加、その他自然条件の変化のように経済システムにとって外生的な形でもたらされるのではなく、あくまで内生的に作動することを論証しようとするところに彼の意図はあった。市場にとっては外生的であっても、広義の経済システムにとっては内生的な形で発現するような動態的要因、シュンペーターは企業者の活動をそのようなものとして把握した。

彼は企業者の活動として次の5点を列記している[1)]。

①新製品の開発。
②新しい生産方法の導入。
③新しい販路、市場の開拓。
④原材料、半製品の新しい供給源の獲得。
⑤新しい組織の実現、つまり新たな独占的地位の形成あるいは既存の独占の打破。

これらはすべてワルラス的な市場にとっては与件の変化を意味する事項であるから、企

---

1) Schumpeter [10] 邦訳、上巻、182－183ページ。

業者はこの世界に与件を変化させる主体として登場することになる。このような企業者の革新行為をシュンペーターは新結合の遂行と呼ぶ。これはたんなる言葉のあやではない。企業の活動とは、諸要素を結合して生産物を生み出すことであり、その結合のあり様が生産関数によって示されているわけだ。したがって、企業者は結合のあり様を変更することによって革新を断行する。ここで結合という行為を拡大解釈すれば、それは物や力の結合だけではなく、分野、領域等の結合も含まれることになろう。ならば、企業者が行う革新行為とは、新たに物や力を結合すべく、分野、領域を結合すべく、それらを仲介する行為とみなされよう。

現実には企業者は資本家や地主、経営者、さらには技術者を兼任することが多々あるのだが、資本を提供しリスクを負担すること、土地を提供すること、企業体を経営すること、新しい技術を開発すること等、それらの行為自体は、シュンペーターの理論においては企業者の活動とはみなされない。例えば、ある人がたんに新しい技術を開発しようと試みているときにではなく、新しく開発された技術を生産現場という経済の領域に導入すべく試みているときにのみ、彼は企業者として振舞っているのだといえる。人が特定の役職や仕事に就いているということは、彼が企業者であるということを必ずしも意味するものではない。つまり、労働者、資本家もしくは地主といった形で企業者という仕事、役職があるわけではなく、人が新結合という現象を引き起こしたときにのみ、彼は企業者でありえるわけだ。その意味において、企業者用役は労働力や土地、資本のような生産要素と同列に論じることのできない特殊な範疇に属する。したがって、この要素は生産関数の論理の網の目にはかからない[2)]。

このような企業者活動の結果として、市場に利潤（純利潤）の発生をみることになる。利潤はかかる企業者活動に対する報酬としての意味をもつのだが、これはコストではなく余剰であるから、価格形成要因とはなりえない。それゆえ、競争が終結した定常状態の下では利潤は消失することになる。

ビジネスの現場に近く具体的、現実的なアルフレッド・マーシャルの企業者論[3)]に対し、シュンペーターのそれははるかに抽象的、理念的な性格が色濃い。それは、シュンペーターがビジネスの現場から企業者的なるものを抽出し、理論の中でそれを純粋培養しようと試みた結果なのではないか。彼の理論では、企業者は完全に市場内に身を置くのではなく、市場外、それは広義の経済システム内であるが、そこから市場内に何か画期的な要因を投げ入れることによってその役割を果たす。つまり、企業者は半身を市場内に、半身を市場外に置くような特異な存在となる。

さて、議論の出発点は市場での長期均衡状態、定常状態である。このような世界に特定の企業者による革新行為が断行される。かかる行為は旧来の価値体系の破壊、創造的破壊という形で市場経済に波紋を投げかける。もちろん、新結合の成功は、当初、彼にのみ利潤をもたらす。だが、そのような状態は永続しえない。なぜなら、彼の事業の成功が多数の追随者を招き寄せることになるから。これらの追随者による市場競争によって、利潤は

2) 生産関数の論理と企業者活動との関係については、塩田［14］参照。
3) マーシャルの企業者論については、Marshall［7］邦訳、2巻、289－290ページ、参照。

徐々に刈り取られ、お終いには再び利潤ゼロの定常状態に落ち着く。ただし、この新たな均衡は企業者による革新という撹乱要因を経済システムが吸収し適応した後の状態だという意味において、旧来の均衡とは異なり、質的な進化を内包している。

均衡→企業者による革新→追随者による競争→均衡、というこの一連のプロセスが連続的にではなく断続的に生じ、経済発展が進行する[4)]。新古典派の理論においては、このプロセス中、企業者による革新の部分は与件の変化で処理され、追随者による競争から新たな均衡に至る部分が市場競争モデルで語られる。ここに市場は新たな動態的要因を内生的に生み出すのではなく、外生的撹乱に適応する調整装置のごときものとみなされ、また市場での競争のプロセスはあくまで機械的な手続きとして処理される。

最後に残された課題、企業者が新結合を遂行する際の資金的裏付けはどのようにしてもたらされるのか。シュンペーターはここに銀行家の本来の業務をみる。企業者に資本を提供するのは銀行家であり、彼は信用創造により新結合に資本を回す。この理論においては、銀行家は純粋な資本家としてリスクを負担し企業者に資本を提供する。この意味において、リスク負担は企業者の業務ではないといえる。またここでは、企業者同様、銀行家もその業務が純化された形で語られる。経済発展に関する常識的な見解と『発展の理論』とは、資本蓄積という現象を巡って顕著な対比をなす。通常の見解では、資本蓄積が発展の原因とみなされることになるのだが、後者にあっては、そのような現象は発展の結果だとみなされていることになる。

シュンペーターの『発展の理論』の構想を単純化して語ると、次のようになろう[5)]。まず、資本主義経済システムの運行は彼の眼にはラセン形の上昇運動のような形態で把握されたのであろう。水平方向の循環的な流れは市場における資源配分という静態的現象を、垂直方向の動きは資本蓄積や技術進歩といった概念で特徴付けられる歴史的時間の経過とともに生ずる動態的現象をあらわす。ワルラスの一般均衡理論は歴史的時間を静止させ、ラセン形システムの一断面を切り取って提示したものにすぎない。それは循環的な流れをあらわすのみの静態的システム、すなわち均等循環経済であり、そこには理論的・物理的時間はあっても歴史的時間は欠落しているから、内生的進化発展を引き起こす動態的要因は存在しえない。市場経済とはそのようなものであると了解したうえで、シュンペーターはこの均等循環のリングを浮上させる役割を企業者に求めたことになる。

このような形で、シュンペーターは資本主義経済システムの発展という動態現象の解明を試みたわけであるが、後年、このシステムの将来を次のように予見する。すなわち、資本主義経済はその内的矛盾によって崩壊するのではなく、その成功ゆえ社会主義システムに道を譲り、その移行の歩みの中で企業者機能は徐々に無用化してゆくと。この一見逆説的で誤解を招きやすい言及をどのように理解すべきであろうか。

資本主義経済システムの成功を経済発展・進歩の実現と言い換えてもよいのだが、その発展のプロセスで市場の寡占化、独占化が進行してゆく。19世紀後半から20世紀前半にか

---

4)「自然は飛躍せず」とするマーシャルの進化についての発想に対するアンチテーゼとして シュンペーターは断続的進化を強調することになる。

5) 塩田［13］の説明に依拠している。

けて、先進資本主義諸国は「競争的資本主義」から「トラスト化された資本主義」へと進化をとげた。他方、そのような時代の流れの中で資本主義システムに批判的、敵対的な雰囲気がとりわけ知識人階級の間に醸成されてゆく。このような知的雰囲気が社会化、計画化という時代の潮流を生み出し、資本主義システムの社会主義への漸進的移行をうながす、という次第である。ここにみられるのは、純経済学的というよりもむしろシュンペーター独自の経済社会学的考察であるといえよう[6)]。また、ここで意味されている社会主義とは、かつてのロシア・ソヴィエトにおけるマルクス・レーニン流のそれではなく、企業体制の社会化が進行し、国家によって寡占体制の管理、規制が行われているようないわゆる高度管理社会のごときシステムに相当するものであるらしい。

彼自身の言葉では次のように語られる。「しかし、経済進歩とともに企業者機能は徐々に無用化していく。企業の大規模化、組織化によって経済進歩それ自体が静態経済の管理と同じに自動機械化される。革新は日常的業務になり、官僚的仕事の対象となる。経済進歩が自動化されると、本来企業者の個性的な業績であった革新機能が無用化される。」さらに「合理化され専門化された事務所の仕事がついには個性を抹殺し、結果の計量可能性がついには「夢」を抹殺し去るであろう」と[7)]。

たしかに、19世紀後半から20世紀前半にかけての時代、幾多の技術革新によって経済の成長、発展が達成されるのと並行して、19世紀中頃にはみられなかったような大企業組織体の生成をみた。これらの大企業組織をシュンペーターは将来の発展の担い手とみなすことになる。かつては個性的な企業者の個人プレーであったものが、やがては組織内でのチームプレーに置き換えられてゆき、進歩が半ば自動化、常軌化してしまう。シュンペーター流の比喩を借りるならば、中世の騎士階級が、戦の集団化、近代的な戦法の確立と普及により没落するように、企業者という階級も革新の組織化によって無用化されていく、といえようか。かつては企業者による感動的な「物語」として語られた経済進歩が退屈な事務的作業に置き換えられてゆく。かくして、「夢」が抹殺されるという表現に要約される事態に至ると彼は結論づける。

2. 企業者神話とその限界

以上が企業者活動にまつわるシュンペーターの議論のあらましであるが、ここには幾多の論点が含まれている。以下で逐次論点を列記し、検討を加えてゆくことにしたい。

(1)『発展の理論』は「理論」なのか、「歴史」なのか。

経済発展という現象は、たしかに諸国において歴史的事実として起こったわけであるし、また現に起こりつつある。さらに、その発展プロセスに幾多の企業者たちの革新行為が寄与したことも容認できよう。だが、『発展の理論』はこのような歴史的事実を経済理論によって説明しようとする試みであったのか。

---

6) 塩野谷［12］参照。
7) Schumpeter［11］邦訳、上巻、238－241ページ。

銀行家の役割についてのシュンペーターの議論を手掛かりにこのことを考えてみよう。彼が若き日々を送ったウィーンでは、革新を遂行しようとする企業者に、銀行家たちは彼の書物で語られているような形で資金を提供することはなかったようである[8)]。同様、ドイツ、イギリス等でも、銀行家があのように純粋な形の資本家として企業者の活動を支援することはなかったはずである。となれば、彼の一連の議論は特定の国、特定の時代の発展現象を経済学的に説明しようとしたものではなく、理念化された資本家（銀行家）と企業者とが結合することによって発展が可能となるとする一種の「理論」として把握されるべきものとなろう。抽象的な数理モデルがそうであるように、これも言葉で構成された一種の経済発展モデルなのである。モデルは事実そのものを説明し表現するものというよりも、むしろそれは寓話、メタファとして了解されるべきものではないか。歴史研究者の側からきわめて誤解されやすいのだが、『発展の理論』は「歴史」ではなく、歴史的時間を組み入れた「理論」モデルとして了解すべきものなのである。だが、これを「理論」として受け止めると、今度は理論家の側から次の論点が指摘されることになる。

(2)『発展の理論』は企業者活動をシステム内に組み込んだ内生的発展モデルであるのか、あるいはそれがシステムに対し外的衝撃としてもたらされるモデルであるのか。

シュンペーターは明らかに前者を指向していたはずであり、そう明言してもいるのだが、新古典派の理論的訓練を受けた人々の眼には、後者のように映る。この論点は多分、彼が達成しようとしたことと、実際に生み出された理論とのギャップのゆえに生じたものであろう。企業者活動は市場にとっては外生的だが経済システムにとっては内生的であるといったとき、その市場を内包する経済システムは、市場モデルのように厳密かつ自己完結的に規定されているのではなく、せいぜい歴史的時間を含んだ開かれたシステムとして数学的にではなく叙述的に定義されたものに止まっている。このように市場と非市場とが峻別され、かつ非市場が市場のように厳密に定義されないとき、非市場から市場に何がもたらされようとも、それは新古典派の理論家たちの眼には外生的衝撃と映ることになる。

ここに、シュンペーターの意図を尊重し、かつ彼の理論を発展的に継承していく研究プロジェクトは二つの方向に分かれる。一つは、市場同様、それを内包するところの経済システムも自己完結的に規定し、その内部に企業者活動を組み込んだ内生的発展モデル、いわゆる新古典派的シュンペーター・モデル[9)]の開発である。企業者用役の供給を内生的に説明しようとするモデルの起点は多分シュンペーターの理論にあるのだろう。だが、これらの数理モデルで展開されている企業者活動は、見方によっては自動機械化された革新行為のごとき印象を与えてしまう。これは、シュンペーターが後年、資本主義社会の未来に見た光景ではなかったか。つまり、新古典派的シュンペーター・モデルは『発展の理論』の数理モデル化ではなく、はからずも彼の未来社会についてのヴィジョンをモデル化してしまったのではないか。いささか皮肉なことに、彼の予見は現実の資本主義社会にではなく、経済理論の世界に実現してしまったようである。

---

8) この件に関しては、伊東・根井［4］33－36ページ、参照。
9) Solow［16］chap.11,参照。

もう一つの研究プロジェクトは、シュンペーターが固執したワルラス的市場モデルを棄却し、F.A.ハイエク［1］［2］を起点とした市場理論の中にシュンペーター流の企業者概念を導入する試みである。これはI.M.カーズナー［5］に代表される新オーストリア学派の研究プロジェクトであり、その妥当性については次節で検討したい。ただし、この方向での研究はシュンペーター理論の真の継承といえるのであろうか。ワルラスの理論は『発展の理論』のコアを成しており、一般均衡理論に対する彼の高い評価は終生変わらない[10]。こういった次第であるから、厳密なシュンペータリアンの眼からは、新オーストリア学派の研究プロジェクトはシュンペーター理論の換骨奪胎と映ずるかもしれないのだが、これもまた彼の理論に触発された一つの建設的なプロジェクトとみなされよう[11]。ここに、シュンペーターにとってワルラス理論とは何であったか、という課題が論点として浮上してくる。

(3) オーストリア学派の伝統の中で育ったシュンペーターは、何ゆえワルラス理論を受容するに至ったのか。

1905年、オイゲン・フォン・ベーム＝バヴェルクはハプスブルク帝国蔵相を辞し、ウィーン大学においてゼミナールを開く。このゼミナールにはシュンペーター、ルートヴィッヒ・フォン・ミーゼスらと共に若きマルクス主義者オットー・バウアー、ルドルフ・ヒルファーディングたちも参加し、反マルクスの立場を標榜するベーム＝バヴェルクとこれらマルクス主義者たちとの間で激しい論争が戦わされた。だが、その論争において、シュンペーターは終始冷静かつ科学的な態度をひとり堅持したとのことだ[12]。おそらく、マルクス主義者たちの熱い議論にシュンペーターは冷たく精緻なワルラスの理論によって「科学的」に対処しようとしたのであろう。彼にとってワルラスの一般均衡理論はマルクスの理論に対する盾としての意義をもつものであったようだ。ただし、一般均衡理論は、その性質上、静態理論でしかありえず、それゆえシュンペーターは動態的なマルクスの資本主義論に対抗すべく、一般均衡理論をコアにした彼独自の動態的資本主義論を構築する必要があった。かくして、マルクス流の階級闘争に基づく動態論に対し、企業者の革新行為に動態的要因を求めた『発展の理論』が生まれることになる。しかし、シュンペーターの理論は彼の生きた時代の知的学問的文脈の中では理解できるものではあっても、今日のわれわれの眼には、機械的・非人格的な市場プロセスと人間的要素としての企業者活動との接合の不自然さが際立ち、また結果としては、社会的エリートである一部の企業者たちに過大な役割を強いる理論になってしまっているのではなかろうか。これが新たな論点を呼び寄せる。

---

10) このことは、後の社会主義計算論争に際しての彼のスタンスの取り方においても、また学説史研究におけるワルラスの取り扱われ方においても明らかである。

11) 付言しておかねばならないのは、いずれのプロジェクトもシュンペーター理論の真の継承とはなりえないという点である。こういった意味からも、彼は孤高の経済学者であったといわざるをえない。

12) 八木［17］129ページ、参照。

(4)『発展の理論』においては、企業者がデウス・エクス・マキナのごとき巨大で英雄的なイメージで語られすぎではないか。

シュンペーター自身に、別段、企業者を英雄視する意図のなかったことは以下の引用箇所からも明らかである。「この類型は、危機に面した社会階級において指導が「人格」や名望を通じておこなわれるような、他の多くの種類の指導者活動にともなうあらゆる人格的光彩を欠いている。その課題は非常に特殊なものであって、これを解決することのできる人は、他のあらゆる点では賢明であることも、魅力のあることも必要ではなく、また教養のあることも、なんらかの意味で「すぐれたもの」であることも必要ではない。彼は成功の暁に加入する社会的地位にあるものの間で、笑いものにされることすらある。彼は典型的に—本質的に、しかしさらに（必ずしも一致する必要はないが）歴史的にも—成り上がりものであり、なんの伝統ももたず、したがって事務室の外にあっては、およそ指導者に似合わぬことだが、しばしば頼りなく、大勢順応的であり、神経質である」[13]。

なるほど、シュンペーターにその意図がないことはよく理解できる。しかし、彼の理論を要約すると、われわれの眼前には企業者の巨大で英雄的なイメージが出現してしまう。こうならざるをえないのは、ワルラス的市場とシュンペーター独自の企業者概念とが奇妙な具合に接合されているという事情による。精巧な機械のごとき市場内には企業者が活動できる余地はないわけだから、企業者は市場の外部から革新をもたらす主体として、池本［3］の表現を借りると「市場機構を超越した主体」として定義せざるをえない。ここに、企業者は均等循環経済のリングをヘラクレスよろしく持ち上げる主体として登場する。

だがその反面、この革新行為に続く市場での競争、定常状態への復帰のプロセスは機械的な手続きで処理されることになる。華々しくスポットライトを浴び英雄的な企業者が登場した後に、その他大勢がそれに追随するというストーリーの展開は、ずいぶんと分かりやすいものではあるが、少数派に属する才能にめぐまれた企業者（エリート）と多数派を成す追随者（大衆）との二分化の図式がいささか誇張されすぎているのではないか。その結果、企業者によって市場外から持ち込まれた画期的なるものは、当初から完成されたものとみなさざるをえないことになってしまう。その後は、市場内で多数の追随者によってそれが模倣される調整プロセスが作動するのみである。しかし、現実の経済でわれわれがしばしば眼にするのは、この調整プロセスがたんなる模倣のそれではなく、そこにおいて製品の改良や差別化がはかられ、製品の完成度が高められていく創造的な競争のプロセスではなかったか。

調整プロセスのこのような側面はシュンペーターの理論においては捨象されることになる。おそらく、シュンペーター流の大局的な観点からすれば、蒸気機関や電気エネルギー、石油化学の成果等を最初に産業（市場）に導入する革新行為のみが資本主義経済の動態的現象の説明にとっては本質的なものであって、それに続く改良をともなう競争のプロセスなどは非本質的なものとみなされていたのかもしれない。あるいは一歩譲って、このような側面はワルラス・モデルで語られる非人格化された調整プロセスの中に暗に含まれてい

---

13) Schumpeter［10］邦訳、上巻、232－233ページ。

ると解釈されるのかもしれない。市場を超越した企業者によってもたらされた革新という側面のみが強調されたがゆえに、それに続く市場内での競争プロセスのもつ意味がシュンペーターの理論においては不当に軽視されたきらいがある。

当初、市場内に持ち込まれたものは胚芽のようなものかもしれず、それを持ち込んだ当事者ですら、その経済的意味を認識できなかった。しかし、それが市場内で競争にさらされ徐々に進化し大きな樹木に成長するような可能性もありうるはずだ。市場内で胚芽が樹木に成長するケース、これは市場経済がはらむ動態的側面を物語る事例ではあるが、ワルラス的な市場観にあっては考察の対象外に置かれている。シュンペーターもまた、あまりにもワルラス主義者でありすぎたがゆえに、これを看過してしまったわけだ。その結果、彼の理論は企業者活動の実態ではなく、後知恵によって構成された勝利者史観的な「企業者神話」を語る方向へと傾斜する。しかも、その「神話」によって、経済的に意義のあるプロセス[14]が隠蔽されることになってしまった。

では、「神話」の英雄たちのその後はいかに、これが最後の論点となる。

(5) 資本主義経済システムはシュンペーター的な意味で社会主義化され、そのプロセスで企業者の機能は、はたして無用化されることになるのか。

シュンペーターが活躍した20世紀前半という時代を考えてみる。1917年、ロシア革命により史上初の社会主義国家の成立をみる。他方、資本主義諸国においても、19世紀にはみられなかった大企業組織が産業の様々な分野で生成し、市場の寡占化、独占化が進行する。また、大恐慌という体験はケインズ主義の普及とあいまって、国家による市場経済への介入をうながす。当然、時代の潮流は「集権化」「組織化」「計画化」の方向を指向していたわけである。

シュンペーターの予見はこの流れが変わらなければ、という条件の下で述べられたものであるはずだ。だが、シュンペーター没後、前述の方向と対立する「分権化」「市場化」というもう一つの流れが、古典的自由主義の復権という形で生み出され、この二つの潮流のせめぎ合いの中で事態は進展してゆく。もちろん、先進資本主義諸国の一部においては、ある期間、高度福祉国家という形態で、彼の予見に近い状況が出来したわけであるから、社会主義化という予見は完全に的を外したわけではない。むしろ問題点があるとすれば、それはその予見に含まれる企業者機能の無用化という側面においてであろう。この側面は経済システムの社会主義化という部分から、ある程度切り離して論じることができるはずだ。なぜなら、シュンペーターは企業者機能の無用化についての議論を企業の社会化、国有化という文脈にではなく、企業活動の大規模化、組織化という文脈において展開しているから。

企業の活動が組織化、大規模化されると、経済進歩に際しても、企業者の役割は不要となるのであろうか。はたして、経済進歩つまり革新行為が半ば自動機械化され官僚的仕事の対象となるのか。

---

14) 市場競争のプロセスは発見のプロセスでもあるとするHayek [2] の指摘する側面がそれである。

たたき上げの成り上がり者的な企業者が高等教育を受けたテクノクラート集団に道を譲るといえば、とても分かりやすい物語となるではないか。しかし、このドラマティックな図式の中に企業者精神の所在が隠蔽されてしまっているのではないか。　大企業組織によって革新が行われた場合、今日でいうベンチャー企業による革新とは異なり、外部からは企業者の働きは視えにくい。それゆえ、部外者の眼には革新が自動機械化されてしまったかのごとく映ってしまうのだが、企業組織が大規模化し複雑化、高度化すると、企業者機能が無用化されるのではなく、池本［3］がマーシャルの理論を踏まえて指摘するように[15]それは純化されてゆくことになる。これこそが大企業組織における企業者精神の在り方なのであり、また、シュンペーターには欠落していた視点でもあった。

画期的新製品の出現という具体的事例を考えてみよう。これが小企業において個人企業者の手で行われる場合、彼は多分、新製品の開発という技術的側面にも、また製造、仕入れ、販売側面にも直接かかわることになるであろう。つまり、彼は技術者、生産者、営業担当者を兼任しつつ企業者として振る舞う。だが、大組織においては、彼は技術、製造、仕入れ、販売等の諸部門に直接かかわることなく企業者機能を遂行する。この場合、彼は技術部門で開発された新製品が生産現場で実際に低コストで生産可能であるか、またこの製品が市場で受け入れられるのかについて評価判定し、各分野に的確な指示を与えなければならない。革新行為を遂行する途上で、彼は各部門を創造的に仲介する機能を果たすことになる。つまり、彼は組織内で純粋な創造的仲介機能を果たすことによって企業者として振る舞う。したがって、大企業組織において、テクノクラートとしての技術者、製造担当者、営業担当者がたんに存在するだけで自動的に革新が遂行されるわけではなく、彼らを仲介し活動を方向づける機能が別途介在することによってのみそれは可能となる、といわなければならない。大組織による革新行為には必ずこの種の創造的仲介機能が介在しているはずなのであるが、これは外部からはきわめて視えにくい。

それゆえに、企業者機能の無用化というシュンペーターの予見は、安易なテクノクラート論へと議論を短絡させる傾向を助長してしまう。シュンペーター自身、企業者機能を純化させる方向に議論を発展させつつも、あいにくその議論を組織内に展開させることを怠ってしまった。彼はどうやら大企業組織に占拠されつつある市場体制に、つまり当時の産業界において彼の眼前に展開された光景に、新古典派の企業モデルがそのまま実体化されるプロセスをみたのかもしれない。ならば、その後に明確な輪郭線に縁取られた内部組織という領域が出現し、そこに生産関数の論理が貫徹される光景を予見しても不思議ではあるまい。かくして、シュンペーターによると、未来社会においては、市場のみならず内部組織にも企業者の活動できる余地は残されていないことになる。

結局のところ、今日のわれわれからみると、シュンペーターの企業者論とは何であるのか。いままでの議論を踏まえると、それは以下の三点に要約されよう。

①経済学という分野において、シュンペーターは経済システム内で企業者の果たす役割

15）池本［3］32－33ページ。

に着目し、その重要性を指摘することによって、鋭い問題提起を行った。この問題提起それ自体は今日にも継承されるべきものである。

②資本主義経済システムの動態性を内生的に解明しようとする彼の理論は、今日のわれわれの眼からは、ワルラスの一般均衡モデルと企業者活動という人的要因とのきわめて不自然な接合と映ってしまう。また、彼によって定義された企業者は、その理論フレームワークにおいては、その意図とはうらはらにきわめて巨大かつ英雄的なイメージで出現する。したがって、彼の理論を今日そのままの形で継承すると、生身の企業者たちが活動するビジネスの現場を遠く離れ「企業者神話」を招き寄せることになってしまう。いま必要とされるのは「神話」を語ることではなく、等身大の企業者像に基づいた市場理論の構築ではないか。

③彼の問題提起を継承することは、多様な研究プロジェクトの可能性をもたらしてくれる。新古典派の内生的成長モデルはその一つの継承である。そこにおいては、高度な数学的メタファの中に企業者活動が埋め込まれることになる。あるいは、新オーストリア学派のように機械論的市場観を棄却し、もう少し緩やかに定義された市場制度の下での企業者活動のあり方を検討するプロジェクトもありうる。ただし、このプロジェクトもいくつかの経路に別れていくはずである。

次節で、この後者のプロジェクトの可能性を探求していこう。

3. 神話からの脱却 —市場と企業者—

先にみたように、シュンペーターの描く企業者像は市場経済というキャンバスからはみ出すことになってしまった。それはいわば、市場を超越した神話の英雄たちのごとき企業者像として結実する。他方、R.H.コースは企業組織体の生成を論ずる中で企業者活動の場を組織体の内部に封じ込めてしまったようだ[16]。いずれの理論においても、企業者活動の場を市場それ自体に設定しえないでいる。これはある意味では不思議なことではないか。なぜなら、われわれが常識的に考えるとき、企業者たちが活躍する舞台とは市場経済ないし市場社会だとみなされるはずであるから。

多分、理論上の解釈と常識的見解とのこのようなギャップは、市場という概念の規定のなされ方の差異に由来する。現実世界において市場は特定の時代と社会の中に組み込まれ機能する。われわれが常識的に市場という言葉を用いるとき、それは特定の時代と社会の様々な諸制度と分かち難く絡み合った緩やかなシステム、その境界は明確でないにせよ一定の広がりを有する実体あるシステムとして了解される。しかし、市場で起こる出来事を理論化する途上で、経済学は市場をこのような時代と社会の文脈から切り離し、理論上の実験室で純粋培養することになる[17]。このようにして得られた新古典派のモデルにおいて

16) コースの取引コスト・アプローチが抱える問題点については、塩田［15］参照。

17) これは経済学が古典派から新古典派へと進化していくプロセスにおいて生じた知的試みである。またそのような試みを通して経済学はモラルサイエンス的な側面を削ぎ落とし、純粋科学指向へと転回していく。

は、市場とは非人格的な価格メカニズム（invisible hand）の支配が貫徹される場であり、その内部で起こる出来事つまり競争プロセスは一意的な均衡、定常状態への機械的な調整の手続きとみなされる。このように市場を厳密に理論化することによって、企業者活動という人的要因は市場外に駆逐されるか、市場に浮かぶ企業組織の内部に封じ込められるか、という事態に至るわけである。結局のところ、このような市場観においては、市場内に企業者が活躍できる余地は残されていない。本来は、市場内にこそ利潤機会が潜んでおり、それを企業者が発見することによって利潤を得るはずであるにもかかわらず。

次のような一連の現象を考察してみよう。まず、科学の特定分野での成果が産業界から着目され、そこから一群の新製品が生み出され、それらが市場に徐々に受け入れられ普及し一段落するという現象がそれである。ここにおいて、当初、科学上の新たな成果が生み出される場は多分市場外であろう。その成果に最初に着目し市場に何らかの形でそれを導入する主体がシュンペーター的な意味での企業者であると考えられる。このようにして生み出された新製品が、あるいは一群の新製品が市場内で普及するプロセスで競争が起こり、利潤が徐々に刈り取られ、やがて定常状態に達する。ただし、シュンペーターの理論をここに適用すると、この一連の現象の後段にくる競争プロセスは、何ら創造的行為が組み込まれない追随者たちによる模倣競争のプロセスとして処理されてしまうことになる。なぜなら、彼が受容したワルラス的な市場世界では、競争プロセスはそのようなものとしてでなければ描けないから。

この現象をもう少し現実に近い次元で再考してみよう。すると、シュンペーター理論ないし新古典派理論では生じなかったであろう以下の論点が浮上してくる。

(1) 当初、シュンペーター的な企業者が市場内に導入しようと試みたものは新製品それ自体であるのか、あるいはその製品の創造を可能にした科学の特定分野の研究活動をも包括したものであるのか。

前者であるとした場合、それは科学が偶然生み出した産物が企業者の手を介して市場に持ち込まれ普及するだけという一過性のブームに終わり、競争のプロセスは追随者たちによる模倣のプロセスと解されても仕方がないことになる。しかし当初、企業者の手を介して市場に持ち込まれた産物が商品として完璧なものであるなどということは実際にはありそうもない。以下に続く市場競争のプロセスで、それは徐々に商品としての完成度を高め、さらにその商品に触発され一連の派生商品を生み出しつつ、市場に普及、浸透していくというのが実情であろう。ならば、市場競争は何らかの創造的な行為を含んだ企業者的プロセスとみなせることになる。

このように考えると、当初の企業者による科学的成果の市場への持ち込みという行為には、その創造をもたらした特定の科学研究分野の市場への取り込みという現象が付随してくるはずである。これがなければ、商品の改良や派生商品の出現が市場内の競争プロセスで内生的に生じてくることはありえないから。つまり、現実には新製品の市場への導入には特定の研究分野の市場への取り込みが必然的に付随する。同様のことは、新しい生産方法の導入の場合にもいえる。産学連携、民間企業による研究所の設置などがこれに相当す

る。ここにおいて、かかる状況を準備し構築することが企業者の役割となる。かくして、企業者の手を介して市場内に導入された特定の研究分野は、それ以降の新製品や改良品の内生的出現を可能ならしめる。このような状況を指してシュンペーターは経済進歩の自動化、企業者機能の無用化と述べたのであろうか。しかし、ここに新たな論点が浮上する。

(2) 産学連携や企業の研究所で研究活動が行われる場合、それは厳密にいうならば、市場内での活動であると定義できるのか。

市場を実体あるシステムとして広い意味で定義した場合には、それは市場内での活動であるとみなされることになるのだが、新古典派のように市場を価格メカニズムの作動する場と定義してしまうと、市場に囲まれ市場の競争圧力を間接的には受けるけれど、大学や企業の内部組織という厳密には市場ではない領域で行われる活動とそれが判定されることになる。ある活動分野がこのように市場内に取り込まれるのだが、直接価格メカニズムによる競争圧力にさらされるのではなく、制度的に何らかの被膜のごときもので保護されているようなケースを指して市場に包摂された事態と呼ぼう。この被膜に相当する制度的工夫を準備する作業も企業者が担う仕事となる。いったんこのような状況が出現すると、後段の市場競争は追随者たちによるたんなる模倣競争ではなく、その中で内生的に製品の改良や派生的製品が生み出される創造的なプロセスとして把握されることになる。シュンペーター的企業者が活躍し、イノベーションが断行される前段のプロセスのみならず、後段の市場内での競争のプロセスにも創造的行為は付随する。シュンペーターの理論では、この後段の競争という現象に含まれる創造的側面[18] が看過されてしまっている。

いま一度原点に帰り、理論化ないし理念化される前の生身の企業者とはどのような存在かを考えてみよう。彼はビジネスの現場で常に他の企業者たちとせめぎ合いつつ[19]、何らかの革新的企画を模索する人物として描かれよう。ここに、企業者は二つの貌を併せ持つ。一方に、仲介作業を担うことによって革新を断行しようとする企業者の貌、他方に、市場でライヴァルたちと競争を繰り広げるプレーヤーとしての企業者の貌がある。生身の企業者というこの同一の主体が併せ持つ二つの貌、役割をシュンペーターは二つの別種の主体に割り当てた。革新者としての貌を割り当てられた主体は、孤高の英雄的存在としてそのイメージを巨大化させる。他方、プレーヤーとしての主体は、群生的に生ずる追随者の一員としてそのイメージを矮小化させる。

このような企業者像の分裂は、シュンペーターによるワルラス理論受容の必然的帰結だと考えられる。新古典派体系の基底をなすワルラス理論においては、市場競争のプロセス

---

18) 企業者にとっての創造的行為とは、必ずしもモノとしての新製品、新素材自体を開発・発見することを指すわけではない。この種の行為は研究者、技術者、発明家にとっての創造ではあっても企業者のそれではない。企業者は市場外もしくは市場に包摂された領域において創造されたモノ、アイデアをビジネスの現場すなわち市場に持ち込み、商品として完成させビジネスとして軌道に乗せる作業の中で創造性を発揮する。この意味において、企業者活動の核心とは、非市場領域と市場領域とを仲介する、広くいえば異分野を仲介する作業の中にあるといえる。

19) Lavoir [6] は競争に含まれるこの種の生々しい側面を示唆する用語として新古典派が用いるcompetitionに代えてrivalryを用いている。

から内生的に革新が起こりうる可能性は排除されている。このような世界においては、革新者としての企業者は与件を変化させる主体として、市場を超越した形で定義せざるをえない。他方、競争プロセスは均衡を達成するための機械的な手続きにすぎないから、このプロセスを担う主体は自動機械化されたプレーヤーと化する。

企業者の活動を歴史的時間の流れの中で考察してみると、どちらかといえば革新者としての貌の側に焦点があてられる。逆に、歴史的時間を停止させ、純理論的視点から考察すると、プレーヤーとしての貌に焦点が絞られる。結局、シュンペーターは同じ主体についての歴史的視点、理論的視点という二つの異なる視点から得られる二つのイメージに基づき二つの主体を派生させたことになる。一方において巨大化、他方において矮小化されたイメージを統合し、等身大の企業者像を復元するためには、企業者活動の場としての市場を新古典派とは異なった形で再構築しなければならない。

ここで今一度、相対立する二つの市場観を整理しておこう。一方の極に新古典派が定義する機械論的市場観がある。ここから、固有の時代・社会から切り離され、実験室で純粋培養された市場モデルが生み出される。ここに、市場は価格メカニズムが作動する場として狭く厳密に定義され、市場領域と非市場領域は境界線により峻別される。これと対峙するもう一つの市場観は、経済学者ではなく生活者としてのわれわれが常識的に想像する市場概念に根ざしている。それは前者より現実世界に近い次元で把握された市場概念であり、固有の時代・社会に組み込まれ機能するような広義のしかも実体あるシステムとして認識されている。だが反面、そこにおいて市場はせいぜいビジネス活動が日々営まれる現場といった程度にあいまいに認識されているにすぎず、それゆえそのような市場観においては、市場領域と非市場領域の境界もまたあいまいにしか定義できない。

もう一つの市場観が含み持つこの種のあいまいさは、純理論的視点からは明かに欠点とみなされようが、企業者活動を論じる視点に立つと、利点に転ずる。なぜなら、企業者活動の本質を異分野、異なった領域を仲介する行為に求めた場合、かかる仲介行為が営まれる場とは、市場と非市場とが交錯する領域、つまり境界領域に外ならないから。したがって、あいまいさの残る境界領域を排し、市場領域と非市場領域とを峻別する理論は企業者活動の場を市場内に設定しえない。またそれゆえ、単一の企業者像が、明確な境界線によって、革新者とゲームのプレーヤーとに分かたれてしまう。分裂した企業者像を等身大で復元するためには、この境界領域を許容するような形で市場というシステムを定義しなければならない。

むすび

歴史的時間を止め純理論的視点から企業者の活動を観測すると、市場という所与のシステムの下、競争を繰り広げるプレーヤーとしての企業者像が抽出される。ここに市場現象は、市場＝競技場、企業者＝プレーヤー、という比喩で語られる。他方、歴史的視点から企業者の活動を観測すると、市場競争による淘汰を生き延びた企業者のみにともすれば焦点があてられるきらいがある[20]。ここにおいては、市場競争という現象そして多数のライ

ヴァルたちの活動は捨象されてしまうことになる。

結局のところ、純理論的に展開された議論に欠落している要因は企業者活動に含まれる革新的・創造的側面であるのに対し、歴史的視点からの議論に欠落しがちな要因は企業者活動の競争的側面ということになろう。したがって、以上二つの視点は相対立するものではなく、等身大の企業者像を構築する作業の中で相互補完的な関係にあるといわねばならない。等身大の企業者は、固有の社会に組み込まれた市場の、しかもその市場領域と非市場領域とが交錯する境界領域において、歴史的時間の流れの中でライヴァルたちと競争しつつ、革新を遂行する。ここに、革新のプロセスと競争プロセスとの関係は、前者が終結した後に後者が始まるといった通時的因果関係としてではなく、同時並行的で相互依存的な関係として把握されなければならない。革新が競争を引き起こすだけではなく、企業者たちのライヴァル関係が革新を刺激する。また、市場経済はそのような活動を許容する場として定義されなければならない。

歴史的視野を踏まえて考えると、様々な分野における企業者たちの創造的仲介行為によって非市場領域が新たに市場領域に取り込まれ、結果、市場領域は拡大し深化することが理解される。新たな科学研究分野が市場に取り込まれ、そこから新しい工業製品が生み出されるように、美術、音楽等の新たな芸術・文化領域が画商、興行師といった文化企業者たちの手を介して市場に取り込まれ、新たな文化興行ビジネスが生み出される。これら企業者たちの活動の結果として、市場経済システムはその領域を拡大させ、深化させるわけだから、企業者にとって市場とはもはや競技場の比喩では語りえぬ何かといわざるをえない。当初、市場を企業者の活動とは別個、独立したシステムとして設定し議論を展開したのであるが、ここに至って市場経済なるものは企業者活動ぬきには存在しえないシステムであることが判明した。

参考文献

[1] Hayek, F.A., "The Use of Knowledge in Society", *The American Economic Review*, Vol.35, No.4,Sept.,1945.

[2] Hayek, F.A., "The Meaning of Competition", in, *Individualism and Economic Order*, University of Chicago Press, 1948.

[3] 池本正純 『企業者とはなにか—経済学における企業者像—』 有斐閣, 1884年.

[4] 伊東光晴・根井雅弘 『シュンペーター—孤高の経済学者—』 岩波書店, 1993年.

[5] Kirzner, I.M., *Discovery, Capitalism, and Distributive Justice*, Basil Blackwell, 1989.

[6] Lavoir, D., *Rivalry and Central Planning : The Socialist Calculation Debate Reconsidered*, Cambridge University Press, 1985.

[7] Marshall, A., *Principles of Economics*, 9th ed., Macmillan, 1961. (馬場啓之助訳『経済学原理』4冊, 東洋経済新報社, 1965—1967年)

---

20) ここでいう歴史的視点とは、表層的な歴史教科書的通説に基づいた見方という意味にすぎない。歴史研究の本来の意図はそのような通説を覆し、淘汰のプロセスにおける生々しいライヴァル関係を掘り起こし光をあてることにあるのだが。

[8] 根井雅弘 『シュンペーター—企業者精神・新結合・創造的破壊とは何か—』 講談社, 2001年.

[9] 西部忠 『市場像の系譜学—「計算論争」をめぐるヴィジョン—』 東洋経済新報社, 1996年.

[10] Schumpeter, J.A., *The Theory of Economic Development*, Harvard University Press, 1934. (塩野谷裕一・中山伊知郎・東畑精一訳 『経済発展の理論,上,下』 岩波書店, 1977年)

[11] Schumpeter, J.A., *Capitalism, Socialism and Democracy*, Harper, 1950. (中山伊知郎・東畑精一訳 『資本主義・社会主義・民主主義 上巻』 東洋経済新報社 1962年)

[12] 塩野谷裕一 『シュンペーター的思考—総合的社会科学の構想—』 東洋経済新報社, 1995年.

[13] 塩田眞典 「経済学における2つの市場観」(『経済学論叢』(同志社大学) 第46巻, 第2号, 1995年, 3月)

[14] 塩田眞典 「誤謬,創造と生産関数の論理」(『大阪商業大学論集』第110号, 1998年,1月)

[15] 塩田眞典 「取引コストをめぐる諸問題」(『経済学論叢』(同志社大学) 第52巻, 第4号, 2001年, 3月)

[16] Solow, R.M., *Growth Theory : An Exposition, Second Edition*, Oxford University Press, 2000. (福岡正夫訳 『成長理論 第2版』岩波書店, 2000年)

[17] 八木紀一郎 『オーストリア経済思想史研究—中欧帝国と経済学者—』 名古屋大学出版会, 1998年.